みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国における民族文化の資源化とポリティクスに関する中間報告：共同研究：中国における民族文化の資源化とポリティクス―南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究（2010-2012）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009400

民博通信

評論・展望　人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ　寺田吉孝

お知らせ　『民博通信』のオンライン化にむけて　吉田憲司

No.164
2019







国立民族学博物館

民博通信 No. 164

『民博通信』は、国立民族学博物館の研究広報誌です。本館において、現在計画中、および進行中の研究について、その学術的な特色、独創的な点、期待される成果などを、研究者を中心に広く発信するのが目的です。



国立民族学博物館ヨーロッパ展示場　イースターエッグ　H0064522ほか

民博通信　No.164
2019 年 3 月 29 日

編集委員
卯田宗平（編集長）
伊藤敦規
宇田川妙子
藤本透子
三尾　稔

編集・発行
人間文化研究機構　国立民族学博物館
〒 565-8511
大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話：06-6879-2151
http://www.minpaku.ac.jp/

制作
毎日新聞大阪本社 大阪事業本部

国立民族学博物館の研究

【基幹研究プロジェクト】
人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進します。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

【特別研究】
「現代文明と人類と未来―環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。その作業を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

【共同研究】
特定のテーマについて、公募も含めて館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2～3年の期間で成果をあげる活動です。2018年度には、31件の共同研究プロジェクトが 組織されています。

【基幹研究プロジェクト】

プロジェクト名	研究代表者	研究期間(年度)
機関拠点型プロジェクト / 人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
○開発型		
中央・北アジアの物質文化に関する研究―民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018－2021
アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田　卓	2017－2020
民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤 玲子	2016－2019
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	野林 厚志	2015－2018
○強化型		
民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築―オセアニア資料を中心に	丹羽 典生	2018－2019
ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	南 真木人	2018－2019
中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	八木 百合子	2018－2019
朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田 心平	2017－2019
中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	西尾 哲夫	2017－2018
広領域連携型プロジェクト		
文明社会における食の布置(「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット)	野林 厚志	2016－2021
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築(「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット)	日髙 真吾	2016－2021
ネットワーク型プロジェクト		
北東アジア地域研究	池谷 和信	2016－2021
現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016－2021
南アジア地域研究	三尾　稔	2016－2021

【特別研究】

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
パフォーミング・アーツと積極的共生	寺田 吉孝	2018－2020
食料生産システムの文明論	野林 厚志	2017－2019
生物・文化的多様性の歴史生態学―希少動物・希少植物の利用と保護を中心に	池谷 和信／岸上 伸啓	2016－2018

【共同研究】

●は館外の代表者

◎一般

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018－2021	●
統治のフロンティア空間をめぐる人類学―国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　徹	2018－2021	●
カネとチカラの民族誌―公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018－2021	●
伝統染織品の生産と消費―文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷 文美	2018－2021	●
心配と係り合いについての人類学的探求	西　真如	2018－2021	●
グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　泰幸	2018－2021	●
ネオリベラリズムの中のモラリティ	田沼 幸子	2017－2020	●
人類学/民俗学の学知と国民国家の関係―20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017－2020	●
文化人類学を自然化する	中川　敏	2017－2020	●
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷 幸代	2016－2019	●
もうひとつのドメスティケーション―家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田 宗平	2016－2018	
捕鯨と環境倫理	岸上 伸啓	2016－2019	
会計学と人類学の融合	出口 正之	2016－2018	
音楽する身体間の相互作用を捉える―ミュージッキングの学際的研究	野澤 豊一	2016－2019	●
「障害」概念の再検討―触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬 浩二郎	2016－2018	
考古学の民族誌―考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	2015－2018	●
医療者向け医療人類学教育の検討―保健医療福祉専門職との協働	飯田 淳子	2015－2018	●
確率的事象と不確実性の人類学―「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤 潤平	2015－2018	●
宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田 浩樹	2015－2018	●
個―世界論―中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤　剛	2015－2018	●
放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原 聖乃	2015－2018	●
応援の人類学―政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽 典生	2015－2018	
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾 瑞穂	2015－2018	
驚異と怪異―想像界の比較研究	山中 由里子	2015－2018	
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
博物館における持続可能な資料管理および環境整備―保存科学の視点から	園田 直子	2017－2020	
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田 浩志	2016－2019	●
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野 泰彦	2015－2018	

◎若手

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田 瑞穂	2018－2020	●
モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木 百合子	2017－2019	
消費からみた狩猟研究の新展開―野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石 高典	2016－2018	●
テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田 晶子	2016－2018	●

研究成果の公開――最近開催されたシンポジウム等から

シンポジウム
「バスケタリーと人類」

日程：2018年11月3日(土･祝)
場所：国立民族学博物館
主催：大阪日本民芸館、科研費新学術領域研究(パレオアジア文化史学)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」



本シンポジウムは大阪日本民芸館における『民藝のバスケタリー――籠・笊・蓑』展にあわせて、同館とパレオアジア文化史学の共同主催により開催した。人類は食糧獲得や運搬などのために、身近にある生態資源をどのように採取､加工してきたかについて､バスケタリーを通じて考えることを目的とした。

研究発表は、かご制作者であり、自身の作品とともに造形論や構造論を展開している関島寿子(多摩美術大学客員教授)、先史時代のバスケタリーの復元にたずさわっている本間一恵(バスケタリーニュース編集人)、マダガスカルと西ティモールでのバスケタリーの製作調査を進めている上羽陽子(本館准教授)の3名がそれぞれの事例について報告した。金谷美和(本館外来研究員)を司会とする総合討論では、コメンテーターの中谷文美(岡山大学教授)から染織品と編組品との相違点や、素材選択における合理性と審美性、民藝と民具の関係など多様な議論を架橋する論点が提示された。これをもとにバスケタリーからみえる人類文化の基底とものづくりの多様性、その技術的展開についての討論が活発におこなわれた。

国際シンポジウム
「客家エスニシティとグローバル現象――華僑華人の拡がりと現在」

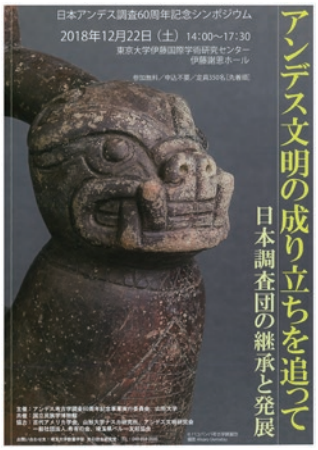
日程：2018年12月15日(土)～16日(日)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館
共催：台湾交通大学客家文化学院、客家文化発展センター
企画：河合洋尚(本館准教授)

漢族の一集団である客家は、世界中で5,000万人を超えると一部では推定されており、その大半が中国大陸の南部、香港、台湾、東南アジア諸国で暮らしている。そのため、従来の客家研究はおもにこれらの国／地域の客家を議論の対象とする傾向が強く、南半球や赤道付近の諸地域に住む客家の現状はまだそれほど知られていない。そこで、本シンポジウムでは、まずアメリカ大陸、環インド洋、オセアニアの客家に関する歴史と現状を報告し、これらの地域の華人社会における客家の影響力と存在感について理解を深めた。海を渡った客家は現地での通婚や同化などを通して、しばしば客家語や客家文化の要素を喪失している。そうしたなかで、客家は祖先崇拝などを通して自己のエスニシティを強調するとともに、客家同士のグローバルなつながりを形成していることが明らかとなった。他方で、現地の華人社会では客家と非客家の境界が曖昧であったり、客家性を重要視していなかったりするにもかかわらず、客家研究者が過度に客家の固定概念を押し付けようとするという研究者の認識論そのものを問題視する声もあがった。このように本シンポジウムでは、客家研究、さらには華僑華人研究の存在意義を問いかける、次なるステップにつながる議論も展開された。


国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象――華僑華人の拡がりと現在」の様子。

日本アンデス調査60周年記念シンポジウム
「アンデス文明の成り立ちを追って――日本調査団の継承と発展」

日程：2018年12月22日(土)
場所：東京大学伊藤国際学術研究センター
主催：アンデス考古学調査60周年記念事業実行委員会、山形大学
共催：国立民族学博物館
協力：古代アメリカ学会、山形大学ナスカ研究所、アンデス文明研究会、一般社団法人希有の会、埼玉県ペルー友好協会



日本の研究者によるアンデス考古学調査は1958年に始まり、今年で60年目の節目を迎えた。これまで、日本調査団は一貫してアンデス文明の成り立ちを探求し続け、数々の重要な発見と研究成果をあげてきた。なかでも、余剰生産物の統御など経済的側面から文明の成立をとらえる従来の学説を批判し、比較的平等な社会において、集団による自主的な神殿の建設と更新が、社会発展の原動力になったとする「神殿更新説」を1998年に提示したことは特筆に値する。しかし、その後は､「神殿更新説」を適用することが難しく、かつ社会的差異が顕在化している事例の発見が続いている。今回のシンポジウムでは、近年めざましい成果のあったペルー北高地のパコパンパ遺跡と中部高地のワヌコ盆地の調査プロジェクトの概要が報告され、従来の研究からどのように理論的展開がなされ、いかに社会の差異化をとらえうるのかが示された。また後半の座談では、新しい世代の研究者も招き、アンデス研究が持つ人類史的意義や、遺跡が存在する地域社会との共創について活発な議論が展開された。

民博通信 2019 No.164

ISSN 0386-2836

No.164

目 次

国立民族学博物館の研究 03

人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ
──共生のためにできること
寺田吉孝 04

現代世界におけるフロンティア空間の動態
共同研究●統治のフロンティア空間をめぐる人類学
──国家・資本・住民の関係を考察する
佐川 徹 10

世界の捕鯨と捕鯨問題を考える
共同研究●捕鯨と環境倫理
岸上伸啓 12

医療者と人類学者による教科書の共同作成
共同研究●医療者向け医療人類学教育の検討
──保健医療福祉専門職との協働
飯田淳子 14

応援におけるノリと近代──沖縄の高校野球を中心に
共同研究●応援の人類学
──政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌
丹羽典生 16

「超自然」の再考
共同研究●驚異と怪異──想像界の比較研究
山中由里子 18

「境界」に置かれるチベットの護符
共同研究●チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究
村上大輔 20

物質と聖性──人文学諸分野からのアプローチ
共同研究●モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相
古沢ゆりあ 22

ヨーロッパ南アジア学会から研究の現在を考える
菅野美佐子 24

インフラストラクチャーをめぐる人類学的研究の動向
古川不可知 25

研究成果の公開 26

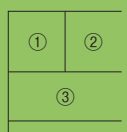
『民博通信』のオンライン化にむけて
吉田憲司 27

評論・展望

研究プロジェクト

海外研究動向

情報



表紙写真
①山道を往来する人とモノ（本誌25頁）
②聖フランチェスコのモチーフのアッシジ刺繍が施されたポプリ（本誌22-23頁）
③エチオピア西南部での原油試掘地の様子。試掘作業は中断していたが、現地の農牧民ダサネッチが雇用され、銃を手に周辺地域を警備していた（本誌10-11頁）